

最

近、「和製アジア映画」をもう一度見直す作業をしている。少々変なネーミングだが、日本以外のアジア諸国の人が主人公となっている日本映画で、特に日本人俳優が彼らに扮した作品をこういう名前でくくってみただ。戦後も、久慈あさみやインドネシア人女性を演じた『ブンガワンソロ』（一九五一年）や、『楊貴妃』（五五年）、『釈迦』（六二年）といった作品が作られているが、国策映画の顔を持つ戦中の「和製アジア映画」が特に興味深い。

その中に、『成吉思汗』（四三年）や『マライの虎』（四三年）などに混じって、衣笠貞之助監督作品の『進め独立旗』（四三年）がある。日本に住むインド独立運動の活動家たちを描いたもので、インド本国からやってきた指導者ナリン王子に扮する長谷川一夫が主役である。

長谷川一夫をはじめ、森雅之、三津田健らインド人役の俳優たちは、白地の洋服姿に濃いドランで色黒に見せ、インド人っぽさを演出している。しかしながらその姿がいささか珍妙なのに

対し、轟夕起子扮する活動家の妻のサリー姿は、まるでベンガル絵画から抜け出した婦人のようで、インド人そのものだ。

確かに、サリーは日本人によく似合う。私もインド旅行中はほぼ毎日サリーを着ているのだが、ある時欧米人女性からこう言われたことがあった。「日本人は髪が黒いからサリーが似合っているいわね。私たちのような金髪だと、サリーを着ても何だか間抜けに見えてしまうわ」。インド人の中にモンゴロイド系の人々がいることもあって、日本人のサリー姿はインド人にとっても違和感がないはずだ。

とはいえ、サリーには着るコツがあるのも事実。前部に作ったブリーツを安全ピンで留め、ドレープを作つて肩に流した部分もやはり安全ピンで留める。これでサリーは絶対着崩れせず、その安心感が姿勢をよくさせて、サリー姿を美しく見せる。轟夕起子のサリー姿もよく見るとピンが存在がわかり、そのせいか動きも自然でサリーの美がよく伝わる。

アジア侵略の下心が透けて見える国策映画ではあるものの、各国の文化を伝える側面も持つ「和製アジア映画」。こういった作品が日本人の中にどんなアジア・イメージを構築したのか、また反対に、アジア映画に登場する日本人像がどのような日本イメージをアジアの人々の間に形作ったのか。その変遷も含め、日本とアジア諸国間の映画によるイメージ構築の歴史を、実際の作品にあたりながらいつか跡づけてみたいと考えている。



イラストレーション：栗岡奈美恵

まつおか たまさ／アジア映画研究者。1949年兵庫県生まれ。76年からインド映画の紹介を始め、現在はアジア映画全般の紹介と研究に従事。「ムトゥ 踊るマハラジャ」等の字幕も担当。

轟夕起子のサリー姿

● 松岡 環